

IMAJ

ニュース
NO.72

発行年月日 1993年12月31日
発行所 (社)国際MRA日本協会
〒113 東京都文京区千駄木5-49-2
ベガハウス ミタケビル102
TEL.03-3821-3737
FAX.03-3821-6479
発行人 住友 義輝
頒 価 1部200円

●世界家族の仲間入り ●信頼できる人との出会い ●新時代に必要な情報 ●心身の健康 ●問題解決の秘訣

世界はこの四年間に大きな変貌を遂げた。良い方向に変化している国もあれば、不本意な状況へと後退している地域もある。イデオロギー対立の時代が終わって、通信、交通の技術進歩によって相互間の移動時間は短縮されたが、異なる人種、宗教、文化の狭間で対立が世界各地で頻発している。互いの相違点を

心の傷を癒し、新しいコミュニティを創造する

あげつらい相手とことさら糾弾するだけでは、相互理解の橋を架けることは困難である。未来に向けての共通の目的、課題を模索することによって、世界各地の多様性、異質性がポジティブな方向に前進するというMRAコー世界大会の理念と、人がより良く変わることを通して、世界はより良く機能する」というMRAの精神を、堅実に発展させることを願いつつ、今年もスイスのコーにおいてM

開会会議「形造られるヨーロッパ」(七月四日～十五日)は、ヨーロッパ全土からはもちろんのこと、中東や北アフリカ諸国

新しいヨーロッパを求めて

R A世界大会が開催された。コー世界大会は今年で四十七回目を数え、「心の傷を癒し、新しいコミュニティを創造する」という全体テーマのもと、七月四日から八月二十二日までの開催期間中に世界七十数ヶ国から約二千人が参加し、日本からも四十名近く参加した。

93 スイス・コーMRA界大会レポート



●他の参加者たちと食事を共にしながら意見を交換するインド北東部のメガラヤ州から派遣された若手政治家たち(中央2名)

心の傷を癒し、新しいコミュニティを創造する

- スイス・コー、マウンテンハウス
- 1993年7月4日～8月22日

第47回MRAコー世界大会開催、世界70数ヶ国より約2千人が参加、日本からも40名近くが参加

主な内容

- 93スイス・コー、MRA世界大会レポート 1 P
◆加川 ムーザ ◆園部 文代 ◆高橋 秀直
◆木下 直行 ◆金子 保久
- アジア・太平洋キャンプ(APC)レポート 16 P
◆兼松 恵 ◆阿部 秀樹
- 奈良選挙浄化運動を振り返って 田合 豪 22 P
- MRA海外レポート 23 P
「MRA国際チーム、上海を訪問」

からの参加者を中心に開催された。

ドイツを東西に隔てていたベルリンの壁が数年前に崩壊し、旧共産圏がまさにドミノ式に“自由化”されていった陰で、新たな見えざる壁がヨーロッパ全域に形成されつつある。ヨーロッパ市場の保護主義化の傾向は前々から指摘されてきたことだが、現在は一般社会も外部に対して閉鎖的になっている。

まず、アフリカ、チャド出身の元ILO（国際労働機関）幹部のモーリス・ヘル・ボンゴ氏



●開会式で挨拶するモーリス・ヘル・ボンゴ氏。中央はモハメッド・イナセア国連チュニジア大使

は、「ヨーロッパ統合の真意はどこにあるのか？ ヨーロッパを強化し世界を支配するためか？ それとも、世界各地の惨事や物質主義の弊害の解決に取り組むためか」と問いかけた。

今回の会議のホストを務めたスイスMRA財団のマルセル・グランディー理事長は、「現在のヨーロッパで起きている恥ずべきことを隠すつもりはない。ヨーロッパは外部からの声に耳を傾けることを知らなくてはいけない。社交辞令ではなく、皆さんの本心を遠慮なく話してほし



●台湾と香港、そして中国（国際交流協会代表团、91年に続き2度目の参加）の参加者が一堂に会した

い」と参加者に呼びかけた。

ドイツにおけるトルコ人、フランスの北アフリカ人、ギリシアのアラブ人といった外国人排斥運動について、モハメッド・イナセア国連チュニジア大使はそうした事実には衝撃を受けながらも、「それでも、外国人迫害を正当化する人は少ないはずだ。

一部の人々が自分たちより社会的に弱い立場にある外国人を怒りの対象にしているが、信心深く良識のある人々によってヨーロッパが良心的に多様化していくことを期待したい」と述べた。

あるフランス人は「もともとナシヨナリズムというのはヨーロッパから世界へと派生していったが、今は改めてその意義づけを考える時である。私たちはこのコーで過去百五十年の歴史を振り返り、改めて自分たちの帰属意識を考えてみたい」と提案した。

活躍した日本の青年たち

毎年恒例の青年会議が今年は休止となり、それに代わり開催された「個人と世界を」なくM



●会議の合間にも交流を深める各国の青年たち

RA」（十八日～二十八日）は、地域、年齢、性別などを一切問わない万人を対象にした「MRAのABC」ともいうべき会議だった。この期間中は、演台の位置を移動したり、参加者が演台の後方のパネルに学んだことを書き込むなどして、参加意識を高め、また、参加者全員が静かな時を通して心の声を聴くことにより、個人、家族、国家、そして世界との関わりなどを学んだ。

参加者の中から衝撃的な発言も出たが、それも四百名の人々

がまさに「世界家族」として過
ごし、お互いに心を開いた十日
間の会議だったからだろう。ま
た、大学生の男女ペアが毎朝演
じたイメージ・キャラクターも、
会議に華を添えていた。日本か
ら参加した青年たちも言葉の壁
を乗り越えて積極的に奉仕活動
に参加して、日本人の新しいイ
メージを提供した。

紛争解決の道を模索する

地域問題会議「危機に直面す
る地域、危機を脱しつつある地
域―互いの体験に学ぶ」(八月二
日〜十二日)には、カンボジア、
クロアチア、ソマリア、そして
内戦終結の見通しが全く立たな
いボスニア・ヘルツェゴビナな
どからの参加が多くあった。

オーストリア、ウィーンのカ
ーニッツ大司教は開会の挨拶の
中で、「国際会議と称する会合の
多くは方法論に走りやすく、肝
心の人間の存在を忘れがちであ
る。悪いことだけに目を向けて
はいけない。明るい面も多くあ
る。私たちはコーで学んだこと
を忘れずに、それぞれの地域で

発展させたい」と述べた。

亡命の中のあるソマリア人はM
RAに携わる人々と交流してい
くうちに、かつて自分が所属し
ていたゲリラ部隊の上官への憎
悪を克服し、今年四月にMRA
メンバーと共にソマリアを訪れ、
かつての上官と固い握手で母国
再建を誓い合ったことを報告し
た。

困難な状況下にある人々は自
分たちだけが悲しみを背負って
いるという自己憐憫に陥り易い
が、コーの会議では、自らの態
度やものの見方を変えたことか
ら得たポジティブな体験を学び
合うことよって、紛争の原因
は何か、和解、解決のためには
どのような努力が必要かという
ことについて話し合いを続けて
きた。新しく発足したカンボジ
ア政府閣僚の中には、これまで
にコーの会議に参加したことが
ある人々が名を列ねている。

多彩なプログラム

今夏最後の会議となった産業
人会議「明日の経済に必要な道
義的基盤」(コー・フォーラム)

(十五日〜十九日)は今年で二十
回目の開催を迎え、日本から参
加したグンゼ労働組合の木下直
行委員長を初め、経済活動にお
ける道義的基盤の確立を求めて、
多くの人々が参加した。「汚職に
立ち向かうビジネス」(経済とエ
コロジー)といった基調講演の
他に、分科会では「家庭とビジ
ネス」など、身近なテーマも話
し合われた。

この他にも特別プログラムと
して、世界各国の大学生を対象



●コー円卓会議の創始者の1人、オランダのフリッツ・フィリップス氏(中央)と、遠藤実在ジュネーブ国際機関日本政府代表部大使(左隣)

に、新しい国際秩序に則した紛
争解決の秘訣を、直接解決に携
わった人々とのケーススタディ
から学ぶ「第三回コー・スカラ
ーズ・プログラム」や、専門家
も交えた「第六回環境問題に関
する対話」、日本からは遠藤ジュ
ネーブ駐在大使をはじめ五名が
出席した「第八回日米欧経済人
円卓会議」が開催された。
それぞれの会議に参加された、
各参加者に報告していただいた。



●手作りの特製Tシャツを講師に贈る「第3回コー・スカラーズ・プログラム」の参加者たち

暗闇をのろうより、一本の ロウソクを点そう

加川ムーザ

日本ユネスコ協会連盟国際交流委員会委員
裏千家淡交会顧問

ジュネーブ空港で合流し、 一路コーを目指す

今回なぜ私がコーに行くことになったかということをはっきりと説明するのはなかなか難しいのですが、とにかくアメリカのシアトルの東京銀行で忙しく働いている妹と、ベルギーの大学を卒業したばかりで職探しに忙しい娘、そして私の三人のスケジュールが不思議な位一致したお陰で、コー行きが実現しました。

八月十日、ジュネーブ空港で合流した私たちは、レンタカーでコーを目指しました。道路地図にはコーが見当たらなかった



一路コーを目指す

のですが、コー近くのモントルーという町で初めてコーの方向を示す矢印を見つけました。それに従って急な山道をどんどん高く登っていききました。車のパワーが持ちこたえてくれることと、ブレーキがしっかりと効き続けてくれることを願いながら走り続けました。幾つかの町や村を通り過ぎると、いきなり素晴らしいお城が目飛び込んできました。MRA世界会議場のマウンテンハウスにたどりついたのです。世の中には不思議、不可解に感じるものが沢山あり

ますが、よく考えてみれば（考える時間さえあれば）、全て理屈に合うもので、どこかで決められた道を歩んでいるということに気付かされるのが結構あるものです。生きることが真剣であればあるほど道は険しくなりますが、それはそれで意味のあることなのでしょう。それがコーとの出会いでした。

茶道の教えにも通じる「コーの精神」

マウンテンハウスからの眺めは素晴らしく、スイス、イタリアの山々の頂きや、レマン湖が一望できました。バイロンの詩で有名なシオン城や、対岸のフランスの町も近くに見える絶景です。マウンテンハウスの中は静寂と平和な暖かさに包まれ、不思議な印象を受けました。予定より三日早く到着したので、それまで行われていた会議の最後の二日間に参加してみました。「危機に直面する地域、危機を脱しつつある地域」互いの体験に学ぶ」というテーマでしたが、大変意義深い二日間でした。コーでの十日間の「活は、



●コーの周りの山道から眺望するスイスの山々



●レマン湖をバックにお嬢さんの理沙さん（左）と



●クッキングチームで一緒に汗を流す

体力的にも精神的にも、また知力的にも大変充実したものでした。もちろんその時何をやっていくかによって、その比重は変わってくるわけですが、クッキング、サービング、クリーニング、生け花、グループ会合、講演、コンサート、友人同士の集まり等、何をしていても常にその「三身」が一体となっていました。四月の東京でのMRAシンポジウムで、J R 東日本会長の山下勇さんが、「人間は神から二つの特権が与えられている。一つはものを作ること、そして

もう一つは他のグループの人にサービスをするということ」と言われましたが、コーではまさにその二つが一体になっていました。そんな雰囲気の中で、互いへの深い興味、和、ユーモア、会話、静けさ、好感、理解がありました。

一緒に生活しているということ、で、それぞれ何かの形でお当番もありました。最初はクッキングのチームに入り、後ほどサービングのチームに移りました。時には朝の七時から三十リットル近くのコーヒーをいれたり、四百五十人分のスフレとかサラダを作りました。あれほどの数の卵や魚やパンを一度に見たことも、あれほどの塩、スパイスを使ったことも、あれほどの食器、水差しを洗ったこともありませんでした。でもそれも結構楽しいもので、一緒に楽しく働きながら、お互いにかげあう「有り難とう」の言葉にも、意義深いものがありました。茶道で千の利休の説く、主人とお客の一体感、和、敬、静寂の教えの持つ普遍性を深く感じ、コーの精神も全く同じだと思いました。

心の痛みを分かち合った大切な経験

ある会合での、ウクライナからの参加者のロシアに関する発言が強く印象に残りました。私の母はロシア人で、私は子供時代をロシア人たちに囲まれて過ごしました。大変に困難な時代、そして環境でしたが、後にはもう体験できなかった程のロシアの最高の伝統や文化の影響を受けながら、旧満州のハルビンで育ちました。

その発言とは、彼らのロシアに対する拭い難い不信感と憎しみでした。私なりにその理由は分かっているつもりでしたが、それを確かめたいと思ひ、「ロシアに対する反感の背景は歴史的なものですか、それとも近代のソ連との関係に対するものですか」と尋ねました。暫しの沈黙の後、「私はソ連しか知りません」という重い答えが返ってきました。

かつてはキエフ・ロシア（現ウクライナ）とか、モスクワ・ロシア（現ロシア）とか呼ばれ対等な関係にあったのに、いつ

の間にかウエリユールス（大ロシア）とか、マロールス（小ロシア）という言葉で差別されるようになりました。九十三世紀にかけての数々の紛争や同盟関係の傷痕が未だに癒されず残っているのです。でもそういったことを直接話し合い、彼らの痛みや知識を分かち合い、文化や伝統を背負っている人びとと触れ合い、感じ取り、理解できたことは素晴らしい大切な経験でした。

音楽は人々の心を一つにする

文化といえ、その素晴らしき表現の一つに音楽があります。が、コーでは様々な音色に耳を傾ける機会もありました。自らも会議参加者であるアフリカ、ナイジェリアの女性が唄う民族音楽のメロディーの一部を、日本生まれの米国人チェリストが奏で、その精神性、ブルース、スイング、スタイルをチェロで表現すると、大変な才能の持ち主である十七才のロシア人少女がピアノで応じ、最後はサマータイムでしめくくりました。時

代を越えて歌い継がれてきた一つの歌が、六十数カ国から集まった人々の心を一つに捕らえたのです。また若いロシアのピアニストの演奏も、素晴らしいテクニクで痛みやノスタルジーが伝わってくる忘れ得ぬ名演奏でした。

若い人たちと時を過ごしたり話を聞いたりする時よくいわれる「ジェネレーション・ギャップ」とは、我々大人の方にも結構責任があるような気がします。子供だからとか、あなた方にもまだ分からないことだからとか、



●理沙さんから給仕のサービスを受ける加川さんの妹さんのフレーザー・リュドミラさん

大人を見習えとか、若い人たちが同士でやりなさいとか、この頃の若い人たちは云々とか言っていると、溝は段々と広がっていきます。これからいかなる会合、協会、フォーラム、シンポジウム等を開いても作っても、若い人を参加させない限り、非現実的であり、将来性に欠け、継承や引継ぎもなく、いずれは立ち消えになるか失敗に終わることでしょう。

フォーラムに参加して

私が参加した産業人会議フォーラム(分科会)⑦のテーマは、「若者と企業はそれぞれお互い何を期待しあっているか」というものでした。司会者はフランス人で、参加者の顔触れはフランス、ドイツ、ポルトガル、イタリア、ベルギー、スイス、ルーマニア、そして日本の八カ国から、数学者、将来の文化人類学者、エコノミスト、ミュージシャン、看護婦、工業・臨床心理学者、ジャーナリスト、実業家、社会福祉施設院長等々と多

彩なものでした。物静かで控え目な人柄ながら、優れた知識人である司会者は、巧みな方法でこのテーマを処理しました。四つの表を使い、ほとんどの答え、質問、疑問、課題は類似しているか、または同一だが、一つだけ正面から衝突するものがあるという結論に達しました。

面白い意義のある仕事、知識と情報のより公正な使い方、環境に配慮した労働条件、個性や正直さ(金銭的、対人的)を認識することの必要性、より良き人間関係、新しいアイデアに対する柔軟性、人的投資、仕事の質、仕事に対する意欲、責任感、制限を受け入れること、機動性、誠実さ、常識などのテーマに対し、唯一衝突するとされたものは、「仕事教とでもいふべき仕事への飽くなき追求」と「労働にいかにか人間性を取り入れるか」という相反する問題でした。生産の無限の追求、無限の要求、制約、または束縛、教育の不足、企業の営利主義から生じる正直な関係と良きコミュニケーションの欠如などが、仕事への飽くなき追求から生じるという結論

に達しました。これらの問題は、後に行われたコー円卓会議でも、表現や切り口こそ多少違い、取り上げられていました。

暗闇をのろうより一本の口ウソクを点そう

一緒に参加した妹も感じるころころが多々あった様子で、自分が感じていた不安というものが決して自分一人のものではなかったこと、そして既にその解決のために努力している人たちがいるということに特に勇気付けられたと言っています。私自身コーでの体験を改めて考える時、いかに難しい課題が前途に横たわっているかということを確認ざるを得ません。コーで私が体験した対話、善意、ユーモア、ハーモニー、多様性、つまり「共に生き、共に働く」ということの、その一部ですら実現させるのは難しいというのが私の重い実感ですが、コーに集う人々の体験と可能性への確信というものが、「暗闇をのろうより、一本の口ウソクを点す」ことに必ずや貢献するということを信じています。

(終)

私が決心したこと・・・

九年MRAコー世界大会に参加して



富士宮市立西富士中学校二年

園部 文代

今年の夏、私はスイスのコーに行き、MRA世界大会に参加しました。二年前に両親と姉と一緒に初めて参加した時、私はまだ小学生だったので、なぜそこに行ったのかさきよく分かり



●クッキンググループの仲間たちと。左から3人目が筆者。右隣はお姉さんの八千代さん

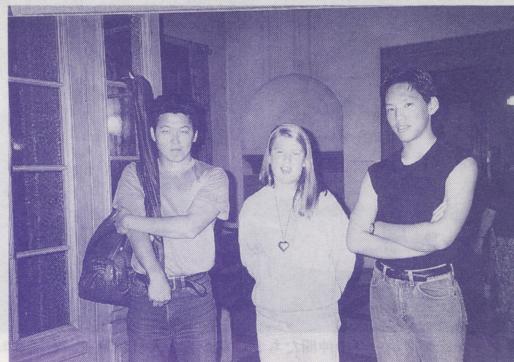
ませんでしたが、今年はいくつも解することが出来ました。コーには、戦争や人種差別に悩まされている人や、そういう人を一人でも多く救ってあげたいと思っている人たちが集まり、国際会議を開きます。私はその会議に参加するためにコーに行つたのです。私が参加した会議では、現在のレバノンのことが議題として取り上げられていました。今年の会議に参加するために、クロアチアやレバノンの人々も少数ですがやって来ました。私は、クロアチアの女の子と友だちになることが出来ました。クロアチアやレバノンの状態は、私の想像をはるかに超える厳しいものでした。私も、クロアチアやレバノンについてもっと知らない

ければならないと思います。コーで生活していると、自然に友だちが出来ます。コーには人種差別なんて言葉は全く存在していないので、一人ひとりが自由に話し合えます。コーは素晴らしい所です。世界中の人々が小さい時からコーと一緒に生活していけば、世界から戦争や人種差別がなくなると思います。私はそんなコーが好きです。しかし、私は上手に英語を話すことが出来ません。英語を話せないと、コミュニケーションをとるのが難しく、国際会議でも英語を話せた方が積極的に意見を言うことが出来ます。私と一緒にコーを訪れた人は、上手に英語を話すことが出来、国際会議で通訳を務めていました。私の尊敬する人です。その人のように英語を話すことが出来たら、どんなに素晴らしいだろうと思います。私は将来、英語、フランス語、ドイツ語を話せるようになります。そのためには、先ず、英語を上手に話すことが出来るように一生懸命勉強して、外国の大学を出よ

うと思っています。二年前に私がスイスを訪れた時、色々な国々の友だちが出来ましたが、私も友だちも英語を全く話すことが出来なかった。で、余り会話が出来ませんでした。でも今年、二年前の友だちと再会出来たのです。そして前よりずっと親しくなりました。私は次の機会のために、一生懸命英語を勉強したり、世界中の様々な問題に関していつも心を開けて生きてゆこうと決心しました。コーは、私の生き方を教えてくれたとても大切な場所となりました。(終)



●仲良しになったクロアチアの少女(左)たちとテラスで一緒に朝食



●スイスの幼稚園教諭(中央)と日本の高校生の辰野君(右)と筆者(左)

カンボジアのキリングフィールドで考えたこと

今年の夏は、私にとっても有意義なものになりました。約二ヶ月の海外での経験は、今までの私の考え方を大きく変えてくれました。私が一番驚いたことは、日本の中での世界の情報の乏しさとその誤りでした。

七月十日、私は国際MRA日本協会の藤田専務理事と息子さんの小学五年生の幸英君と一緒に成田を出発しました。最初に私たちは、タイとカンボジアを訪れました。一度は行って見たかった国々だったので、とても感動しました。

今までにない大きな体験

=コー世界大会に参加して=

高橋秀直

国士館大学2年生

タイは、韓国、香港、シンガポールと並び、今急成長している東洋の四つのドラゴンの一つです。私のイメージしていたタイは、宗教の盛んなのんびりとした国というものでしたが、それは全く違いました。私の目に入ってきたタイは、まるで日本の高度経済成長の時のような風景でした。人々も活動的で、いかにもこれからの国という雰囲気漂っていました。

カンボジアは、日本の新聞やニュースでも盛んに報道されていたように、緊張の漂うどちらか

というマイナスイメージの大きい国と思っていました。しかし、私が見たカンボジアはそれとは似ても似つかない国でした。人々は親切で、町並みも東洋のパリと呼ばれていた頃の面影が所々に残っていて、とても過去に大虐殺が行なわれた国とは思えません。しかし、まだ現実に、ポルポト時代の痛ましい傷跡が残っていました。それは、キリングフィールドです。

私と幸英君は、カンボジアに長く居られる田鹿令子さんの案内で、そのキリングフィールドと、ポルポト派が処刑に使ったという刑務所に行きました。そこには、現在も生々しく、血痕や処刑に使われた道具、それに殺された人々の顔写真などが残っていました。幸英君も子供ながらにショックを受け、又、私も人間の恐ろしさと弱さ、そして変わり様にとても複雑な気持ちになりました。でも今カンボジアは、生まれ変わる力を持つとうとうしていることも事実です。滞在中も藤田さんは、何人もの政治家や大使館の方々と何度も会談をして、どの様にしたか

カンボジアのためになるか、カンボジアの方々もMRAの考え方を理解し、自分たちの国のために一生懸命頑張っているのを隣で見聞きして、素晴らしいと思うと同時に、とても他人事とは思えず、うれしく感じました。

一番最初の友人はレバノン人のルームメイト

そして七月十五日、私たちはスイスに入国し、MRAの国際会議場のあるコーに向かいました。スイスは、タイやカンボジアとうって変わってまるで天国



●今年もカンボジア人たちがコーに集い話し合った

が地上に降りてきたような、健やかな自然と、よく計画されている美しい町並みが私の目に入ってきました。山の中腹に城のように建っている、今回の本命とも言えるべきMRAの国際会議場、マウンテンハウスに到着しました。

そこは、私の思っていた以上の所でした。世界各国から集まったあらゆる人種の人々が、共同生活をしながら滞在し、国際会議に参加していました。

私にとって、ヨーロッパは初めての土地でした。私は昨年インドに行つて、文化、風習の違いにとってもショックを受けた経験があり、今回も少し不安がありました。しかし、来たからには何かものにしなくてはと思い、まずは友だちを作る努力をしました。私はいつも、初対面の人に英語で丁寧に挨拶をしました。その時には、笑顔で話してくれるのですが、次の日になると、挨拶をしても無視、初めは発音でも悪いのかと思いましたがそうではなく、私は悩みました。そこで私は、色々な人に相談しました。そこで分かったことは、

先ず私が英語が出来ないこと、それから外国人、特にヨーロッパの人々は初対面の人を信用せず、また、グループ意識が強く他人をなかなか受け入れてくれない、そして、人と付き合う上でメリットを考える人々だということでした。私のヨーロッパの人々へのイメージが変わってきました。

しかし、レバノンから来た、私のルームメイトのジョーに、「決してその様な人ばかりではない。私は、あなたをいい人だと思う。だから英語に慣れるために色々な人と話してごらん」と言われ、少し救われたような気がして、また頑張ろうと決意できました。私にとって、彼が一番最初の友人になりました。

彼は妹さんと二人で、コーに来ていました。今レバノンは、シリアとイスラエルに挟まれ、両国の宗教戦争に巻き込まれている状況で、私たちが滞在している間も、イスラエルがレバノンを爆撃したと新聞で報道されていました。私にはジョーの心中を察し、家族のこと、友人のことなど、心配でしかたないだ

ろうと思えました。そして、私はある夜、彼と夜遅くまでレバノンについて語り合いました。その時、初めて本当のレバノンについて理解できました。

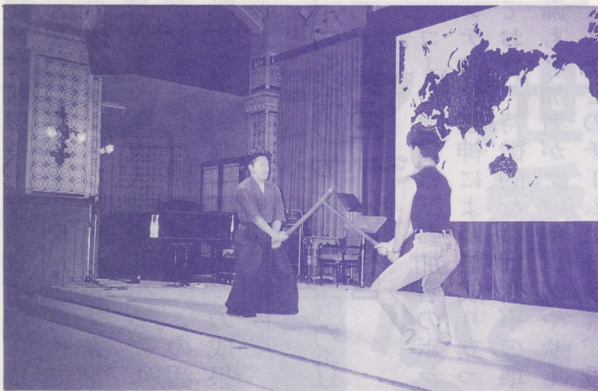
視野が広がった今夏の体験

この様に、コーへは世界各国から色々な人々が集まり、経済問題、精神世界の問題、また、普通は政治的、宗教的なしがらみによって話し合うのも困難な問題を、会議では勿論のこと、一緒に働いたり食事する時に、

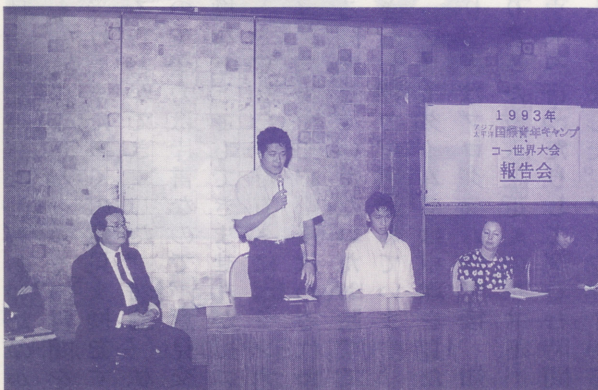
また、私のように、ルームメイト同士で腹を割って話せる空間を提供している素晴らしい所でした。

今年の夏は、私にとって今までにない大きな経験ができました。今まで、何の苦勞もなく生活し、日本という小さい国で、狭い視野でしかものを見ることができなかったことに気付かされ、また、外国の文化、習慣を身を以て経験できました。お世話になった皆様に心からお礼申し上げます。

(終)



●得意の剣道の腕前をコーの壇上で披露する



●9月に東京で行われた報告会で報告する筆者



●グンゼ遠藤会長ご夫妻（中央）他と食事する筆者（右から2人目）

スイス、コーMRA世界大会に 参加して

グンゼ労働組合中央執行委員長

木下直行

友人を多く得たコーでの体 験

八月十五日から十九日まで、
コー産業人会議に参加させてい
ただきました。会議の前日にマ
ウンテンハウスに入りましたが、
レマン湖を見下ろし、青い山々
が連なるまるで絵葉書から飛び
出したような風景が、多少の不
安を持って単身参加した私をさ
わやかに迎えてくれました。

今回の参加は初めてですが、
参加のきっかけはグンゼの遠藤
会長から参加してみないかと声
をかけられ、MRAの趣旨や内
容を説明してもらったことから
です。世界との関わりが大きな
影響を持つ時代に、労働組合も
グローバルな視野を広げる必要
を感じていたため、ベルギー、
ドイツの関係工場や駐在員を訪
問することも兼ねて出席させて
いただきました。事前にMRA
を紹介する本や機関誌をいただ
き、参加者の人間的な交流を深
められていること、日本の各企
業の労使

続けて成果を上げられているこ
とを知っていました。コーで
の体験はまさしく友好的な雰
囲気があり、友人を多く得るこ
とができました。これまでこの活
動に努力されてきた方々の成果
の上にあるものと思えました。

ボランティア精神で成り立 っているコーの運営

コーの運営は、参加者のボラ
ンティア精神によって成り立っ
ており、特徴的なのは食事の準
備も参加者がクッキングやサー
ビスなどのチームに分かれ、役
割分担しながら進められていま
した。準備をしながら会話を交
わしていると、何となくそのチ
ームとしての一体感が生まれて
くるようでした。こうした運営
は珍しいと思いますが、人間的
な交流を図ろうとするコーの集
会にとっても役立つようなよう
に思いました。

朝、昼、夕の食事に加え、テ
ィタイムなどに各国の方々と
食事ができるように設定してい
ただき、毎回時間の許す限り長
時間話をしていました。今回、
労働組合関係の参加は本から

私一人だったこともあったのか
も知れませんが、多くの質問を
受け、また多くの意見交換をす
ることができました。勿論、私
の英語力は片言なので、意見交
換などとてもできませんが、コ
ーで知り合った方々にボランテ
ィア精神でその都度代わる代わ
る同席していただいていたお陰で
きたわけで、感謝しています。

フリータイムには卓球をした
り、夜はプログラム終了後、知
り合った友人と近くのレストハ
ウスへ行ったりして楽しむ時間
もありました。ノルウェーから
のルームメイトは、たまたまそ
の後日本に来る予定があったの
で大阪で再会し、さらに交流を
深めました。

世界の人と人の「和」が広 がることを祈って

産業人会議のテーマは、「明日
の経済に必要な道義的基盤」を
メインに置き、各国の経済人や
学者などからコーの精神や経済
的摩擦、政治、失業、環境問題
など多岐にわたる視点からの講
演がありました。また、フォー
ラムでは三十ヶ国約二百人の参

加者が、七つのテーマに分かれて話し合いました。私は「労働力の質と活用」というフォーラムに参加しました。会議は窮屈でなく自由な感じで、しかし真剣に沢山の意見が出されました。人の力を最大限に発揮するためには、人間関係や責任、役割分担など必要なこと、自分の恐れや勇気について、組織の持つ雰囲気などが影響することなど話し合いました。日本の労働者の考え方なども紹介しましたが、能力に依じて仕事を任せ賞賛すること、会社の状況を公開すること、納得性を重んじることなど信頼関係を作ることが前提であることを意見として話しました。欧米では、経営者と労働者は全く別物という感覚があるためか、日本の労使関係に興味を持たれたようでした。産業人会議を通して、程度の差こそあれ、どこも現場には同様の問題点や悩みがあること、日本人という視点では、他国の状況を理解し、世界の中で共生していかなければならないことを学びました。フォーラムは会議の運営が工夫されていたので、三日間でした

が参加者として古くからの知り合いのような気持ちにさせてくれました。過去の海外へは数回行っていましたが、今回のMRAへの参加は意思疎通という点で、一回り視野を広げてくれました。食事の時、ある英国人から「日本の人は能率や利益に対して限度を持っているのですか」と聞かれました。労働時間や家族とのコミュニケーションの視点からの質問でしたが、答えに困りました。ゆとり、豊かさとは、世界の日本のバランス、公正など真の人間らしさとは何かを考えさせられました。

多くの人と知り合えた五日間のコーの滞在でした。特に、日本からは素晴らしい方々が参加されており、MRA日本協会の方々と大変お世話になりました。今後も機会があれば参加したいと思えます。このような機会が益々発展され、世界の人と人の「和」が広がることを祈念し、感謝しながら筆を置きたいと思えます。有り難うございました。

(終)

◇MRA関係ビデオのご案内

ドライ・ラマ14世

からのメッセージ

愛と心の平和



好評発売中!

VHS (20分) 4,500円 日本語吹き替え

編集・発売 アジア・フォーラム
企画・制作 (社)国際MRA日本協会



●スーダン、ケニア、ジンバブエ、ナイジェリア、モーリシャス、カナダの女性たちによる即興の創作ダンス



●参加者もボランティアで運営に協力する。左の2名は神戸から参加した宮崎さんご夫妻



Eighth Caux Round Table - August 19 - 22, 1993, Switzerland

●右から6人目が筆者

第八回コー円卓会議に参加して

■スイス・コー、マウンテンハウス

■1993年8月19日～22日

金子保久

松下電器産業海外部門東京担当副理事

第八回コー円卓会議は、八月十九日より二十二日まで例年通りスイス・コーのマウンテンハウスにおいて開催された。欧州より九名、米国より七名、日本より五名の参加を得、「高まる貿易対立を回避するには、いかなる姿勢の変化が必要とされるか？」のメインテーマの下に、六議題にわたり討議が行われた。概要は次の通り。

一、経済展望

出席者の現在の世界経済情勢観のベクトル合わせを行なった。

(1) 一国だけで世界の経済回復の原動力となるエンジン国は存在しない。米、日、独が協力し合う時代である。ジャパン・バッシングだけに、世界経済の回復の障害となる。

(2) 失業問題が最重要課題である。

(3) 旧共産圏諸国のインフレが問題である。投資増加による失業解消が不可能なら、雇用の共有という考えも検討に値する。

(4) 期待される大型市場として

は、中国、ロシア、旧東欧がある。

(5) 世界経済の回復見込みは暗い、との見解一致に達した。従って、世界の不況と失業問題解決のためにも、ガットの締結は重要である。

二、資本の有効性とコスト

(1) 経済活性化には社会に役立つ革新的商品が牽引役となるが、その新商品が存在しない。

(2) 価格競争に勝つための低賃金を求めるの海外進出は近視眼的であり、技術移転を含む地域貢献を礎とすべきである。

(3) 米国は一九九五年に、累積債務によって破産するという「一九九五年合衆国破産」(H・フィギー・Jr著)は必ずしも心配することはなく、米国政府も着々と対策は打っている。

(4) 日本では大恐慌(一九二九年)以来、銀行が保護され、長期的視点の資金対応をするのに対し、米国は四半期の利益ばかり気にするとい

三、市場資本主義、成長と雇用

(1) 資本主義はいい仕組みだが、バランスに欠ける点もあり、欧州では利潤追求だけを求めるといわれる。商品とサービスの提供にもっと努力すべきだ。

(2) 雇用創出と失業対策が世界的課題である。(失業率 欧州十一・六%、米国七%弱、日本二・二%) 日本は低率ではあるが、企業内失業を加味すると七〜八%にもなる。

(3) 失業対策としての「保護主義」台頭を懸念する。発展途上国と環境問題に配慮した失業対策が必要だ。

(4) 企業家は「成長」に努力し、雇用創出と社会資本の充実に官民一体となり立ち向かう責任がある。

四、中国及びロシア関連

グンゼ遠藤会長が本年四月のコー円卓会議メンバーによる、中国、華南訪問も踏まえて中国

の現状に対する報告を行ない、
(1) 華南の発展は目ざましいものがあり、将来が期待される。

(2) 反面、インフラストラクチャーの整備。

(3) 法律関連の整備。

(4) 汚職と腐敗。

(5) 所得と物価水準の格差。

と多くの課題が残されているとの指摘を率直にされた。

ロシア関連では、シベリア地区よりの代表二名（スプラン氏及びリシコフ氏）が、

(1) ロシアは政経、道徳面で危険な状況にあることを世界は認識されたい。

(2) ロシアは世界の支援が必要。

(3) 間違った情報が入り乱れているので、踊らされない事。

訪ロシアで実状を見てほしい。

(4) 戦後復興実績の素晴らしい日本に学びたい。

(5) 市場的には期待される大型であり、世界経済の回復の原動力たりえる。

(6) シベリアに正直、誠実、連帯などの価値を取り戻す倫理協会を設立した。是非円

五、貿易、投資関連

卓会メンバーの来訪を願いたい。（来年円卓会議の訪問を検討することとなった）

(1) 完全な「自由貿易」は実現不可能なるも、自由貿易の

精神が世界経済活性化には

必要。より自由な貿易が雇

用の拡大をもたらす。

(2) それには途上国、先進国の

両方に通じる「共通ルール」

作りが必要。

(3) ウルグアイ・ラウンドの解

決こそ、その鍵である。こ

れが挫折すれば、世界の雇

用、貿易、脆弱な経済全て

に大きな打撃を与える。

(4) 「管理貿易」にメリットはない。

(5) EC、NAFTA、EAE

C、APEC他、世界には

二十以上の大小地域貿易協

定が存在するが、保護主義、

排他主義にならぬよう提言

する必要あり。

六、グループ討議

Aグループ（共生とミネソタ企業規範）

(1) 「共生」及び「ミネソタ企

業規範」理念を、コー円卓

会議基本理念として採択す

る。

(2) 但し、「行動基準」は国際的

に通用する内容で検討をす

る。

(3) その度に、米、欧、日で構

成されるプロジェクトチー

ムを設定する。

Bグループ（失業問題）

(1) 失業問題は最重要課題。

(2) 失業対策は官民一体となつ

ての促進策が必要。

(3) 関連法案、公共投資増加、

規制緩和等での対策も必

要。

(4) 企業家に雇用創出努力の責

任がある。

Cグループ（今後の活動について）

(1) コー円卓会議として声明文

を発表する。

(2) 日米欧のMRA事務局の支

援は受け続けるが、CRT

独自の財政基盤強化を検討

する。

(3) 参加者拡大も検討するが、

活発な会議のための適正な

人数も考慮に入れる。

(4) 一九九四年までの総括議長

としてホードリー氏（フー

バー研究所シニアフェロー）

を選出する。

(5) 次回中間会議は九四年春に

ベルリンで開催する。夏の

ロシア訪問も検討する。

コー円卓会議

ニューズリリース

「世界が現在抱える最大の経済問題は雇用創出と失業対策である」。以上がスイスのコーで開催された日米欧の財界人参加による円卓会議の重要な結論であった。

この会議は一九八六年に諸国間における経済摩擦を沈静化するための話し合いをする目的で発足したものである。

自由且つ公平な世界貿易を推進することが、ひいては世界経済活性化に通じて雇用促進につながるものであり、ウルグアイ・ラウンドの成功がその鍵である。従って、「積極的な行動に基づきウルグアイ・ラウンド締結を推進すべきである」というのが同円卓会議の声明である。

ネスの成功に対する障害を具体的な解決策と共に明らかにしなければならない。経済政治戦争の危険は増大している。そうした事態によつて生じるリスクはビジネスのリスクと表裏一体である。ビジネスだけで世界の諸問題を解決できないのは明らかであるが、一方現在および今後の混迷の時代を傍観しながら繁栄を望むこともできない。

世界経済がこうした挑戦に立ち向かうにあたって、CRTはどんな有効で建設的な役割を果たすことができるか？

CRTの強さには以下のようなものがある。

- ・ 国や地方の利益や関心を越えた地球的な展望。
- ・ 経済対立を監視し、緩和することに對する並々ならぬ関心。
- ・ 他に對する理解を深め、非難や指差しを避けることを強調する慎重なプロセスを用いる。
- ・ 有力な経営者と専門的なスタッフの参加。
- ・ 各国における高い政治レベルでの有力なコンタクト。
- ・ 国際ビジネスに関する豊富な情報や具体的な政策決定レベルでの豊富な経験。
- ・ 一般的に前向きなイメージ、熱心な関わり、信頼性、清廉さ。

世界の成長と平和を維持し、促進するというゴールをCRT以上に高い質をもつて目指す民間の機関はほとんどない。

CRTは貴重な存在力を秘めているが、それを活かすには、自力を高め、ビジョンを洗練し、より多くの有力経営者を魅きつけ、存在感を高め、安定した経済成長と平和のための建設的理念を擁する大きな勢力であることを示すことが必要である。これらの実行には他の機関も加わることができるとは思えない。

CRTは経済の発展と善意の推進に努力を傾けている唯一の国際民間組織ではない。従つて、他の類似したグループが行っていることに遅れをとらないことも重要である。更には、共産主義の崩壊や世界的な市場原則の受け入れに伴い、民間セクターとの関係樹立や関係改善に対する国際機関の関心が高まっていることは、CRTが同様の関心をもつ政府指導者や機関とのふさわしいリンクを模索し、深める良い機会である。

他のダイナミックで影響力のある協力的な機関とのリンクは、CRTの立場と効果を高めるかもしれない。有力な機会も探ることができる。

ポランテニア精神こそ、建設的変革と理念の基礎である。CRTはそうしたボランティア精神とMRAの不可欠なスタッフのリーダーシップと支援に負うところが多い。CRTのメンバーがコアの議論から生まれた原則を活かして地球の将来を形作る機会をとらえる気持があるのならば、CRTは広報活動、スタッフ、財政といった物理的問題も解決しなければならない。こうしたチャレンスを受け入れるためには、CRTメンバーからのよりはるかに必要になる。

CRTが将来たどるべき道は何か？

中間の立場というのは実際存在しない。CRTがより世界的な政策のリーダーシップを発揮する立場に到達するか、さもなければ、いかに情報が得られる楽しい会合であつても、論議が空洞化し、自己満足になつてしまう。この場合はあまり長続きしないであらう。

一九九三年八月の会議に對する関心と熱心な支援が得られたことは、CRTが大きな前進を目指す決断の時期にあるかも知れないことを示している。胸襟を開いた意見交換が不可欠である。私たちの前にある最善のコースを選択できるよう参加者一人一人の協力を願いたい。

CRTは変化をもたらすことができるか？

できるメンバーがそうだと同意するのであれば！！！！

第八回コー円卓会議参加者

一九九三年八月十九日〜二十一日

■ヨーロッパ

モーリス・アミール (フランス)

フレデリック・パウアー夫妻 (ドイツ)

MST社社長 シーメンス元取締役

ネビル・クーパー夫妻 (イギリス)

ジョン・コックス (イギリス)

ジョン・ル・デス夫妻 (フランス)

オリビエ・ジスカルデスタン (フランス)

セルジオ・ジュリアニ夫妻 (イタリア)

フレデリック・フィリップス (オランダ)

フレデリック・シヨック夫妻 (ドイツ)

フレデリック・シヨック夫妻 (ドイツ)

フレデリック・シヨック夫妻 (ドイツ)

フレデリック・シヨック夫妻 (ドイツ)

フレデリック・シヨック夫妻 (ドイツ)

フレデリック・シヨック夫妻 (ドイツ)

フレデリック・シヨック夫妻 (ドイツ)

フレデリック・シヨック夫妻 (ドイツ)

フレデリック・シヨック夫妻 (ドイツ)

フレデリック・シヨック夫妻 (ドイツ)

フレデリック・シヨック夫妻 (ドイツ)

フレデリック・シヨック夫妻 (ドイツ)

フレデリック・シヨック夫妻 (ドイツ)

フレデリック・シヨック夫妻 (ドイツ)

フレデリック・シヨック夫妻 (ドイツ)

フレデリック・シヨック夫妻 (ドイツ)

フレデリック・シヨック夫妻 (ドイツ)

フレデリック・シヨック夫妻 (ドイツ)

■アメリカ

ステファン・ブラスウェル夫妻

ブルーデンシヤル保険 投資サレヒスグループ本部長

ジョン・チャールトン

チャールズ・デニー

ハリー・ハマリ

ウォルター・ホドリー夫妻

フーバー研究所シニアフェロー 元バンクオブアメリカ副社長兼チーフエコノミスト

ロバート・マクレガー

ジェイムズ・モンゴメリー

バンナム・ワールドサービス元会長

遠藤源太郎夫妻

遠藤実夫妻

在ジュネーブ国際機関日本政府代表部大使

小笠原敏晶夫妻

ニフコ社長、ジャパントイムズ元会長

賀来龍三郎

金子保久

松下電器産業海外部門東京担当副理事

松本浩一

松本浩一

松本浩一

松本浩一

松本浩一

松本浩一

松本浩一

松本浩一

松本浩一

APCLレポート

第4回アジア・太平洋青年キャンプ(APC)レポート

「新しい時代の挑戦に答える」

インド、カンボジア、マレーシア、シンガポール、フィリピン、中国、台湾、韓国、香港、オーストラリア、ニュージーランド、イギリス、日本の13ヶ国・地域から52名が参加



●習った各国の歌を早速披露する参加者たち

「これまでの人生で、これ程何回もシャワーを浴びたことはありません」と一人の参加者が述べたように、冷房のないひどく蒸し暑い香港大学の学生寮で、今年のキャンプ（七月二十一日～三十日）は始まった。

「しかし、キャンプが始まって色々な国からの参加者と知り合い、彼らとの文化や宗教やライフスタイルの違いを知ることがとても興味深く感じられました」と同参加者が続けたように、キャンプが始まって以来、宿舎のコンディション等に文句を言う参加者は皆無だった。今回は、

インド、カンボジア、マレーシア、シンガポール、フィリピン、中国、台湾、韓国、香港、オーストラリア、ニュージーランド、イギリス、そして日本の十三ヶ国・地域から五十二名が参加した。日本からは昨年に続き、中国帰国者二世で、かつて自らがあつた境遇と同様の立場にある子供たちのために、小中学校で通訳をしている岩佐長子さん、初参加で会社員の阿部秀樹さん、元MRAの専従として活躍していた兼松恵さん、そしてMRA事務局から一名と、計四名が参加し

心を開いて素直に語り合つた十日間

キャンプの朝は早かった。七時には皆で体操、その後、その朝のテーマが与えられ（例えば恐れ、あるいは自分が苦手とする人との関係等について）、皆それぞれ静かにそのテーマについて考える時間を三十分程待ち、その後グループ毎に集まって、お互いに得た考えをわかち合つた。ある参加者は、「今まで親しい友人にも話さなかつたことを、ここでは安心して話せた」と語つた。キャンプを通してお互い心を開いて素直に話し合つたからこそ、十日間という短い期間であつたにもかかわらず、このキャンプで初めて知り合つた者同士が、分かれ際に涙を流し合う程親しくなれたのである。

プログラムは、バラエティーに富んだものであつた。「どんな人生を選択していくべきか」、「健全な人間関係を創るために」、「チエンジⅡ世界と私たち」といったテーマで行われた「心の開発」セミナー、お互いの理解を深めるのに役立つグルー



●熱心に聞き入る参加者たち



●会場となった香港大学の学生寮

カッション、そして、歌とドラマのワークショップの時間も設けられ、歌のグループは、英語の歌や、韓国やカンボジアの歌を習い、ドラマのグループは、「国境を越えて橋を架ける」のテーマで、寸劇を作ったりした。

外部から講師を招いて話を聞く機会も与えられ、「青年に関する諮問委員会」のエリック・リー議長からは、「二十一世紀に生きる青年の挑戦」のテーマで、又、憲法事務局のパトリック・ホー副事務局長からは「公正で思いやりのある社会を作るために」というテーマで、そしてこのキャンプのために、フィジーからわざわざ香港まで来てくれたフィジーの一部族の長であるラト・メリ氏からは、先住フィジー人とインド系フィジー人との間の憎悪を煽っていた立場から、どのようなプロセスを経て、双方の融和を図る活動に携わるように自分が変わっていったかという感動的な話を聞くことができた。

又、香港青年連合会や、ユニークな組織である独立汚職防止委員会、そして立法評議会等を

訪ねる機会も与えられ、香港に対する理解を深めることができた。一夕には、小グループに分かれ、それぞれ香港のホストの家庭に招かれ、彼らの暮らし振りを垣間見ることもできた。

美しい町並みが印象的だった珠海

キャンプの終盤には、二泊三日の日程で、広州、そして珠海を訪ねた。広州では、広州アトアカデミー等を訪ねると共に、キリスト教会を訪ね、若い信者たちからの話を聞いたり、MRA側から話したりといった交流も行われた。翌日には、珠海でキャノンのカメラ工場を見学させてもらった。「共生の哲学」の下に中国人従業員との融和と協調を図りながら経営がなされているという説明が、工場を回って実感された。

珠海は都市計画もよくなされた、美しい町並みが印象的であった。しかし、夜、皆で町を散歩中、小学生位の花売りの少女たちが我々にまとわりついて離れようとしなかった。開放政策による経済ブームに沸く中国の

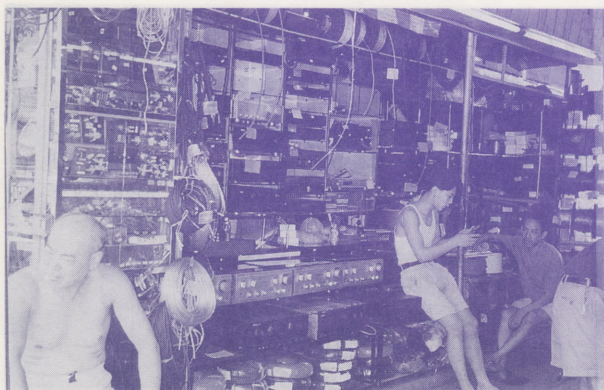
違った側面を示された。中国から帰った翌日のキャンプ最終日には、香港の人たちのために、ユースキャンプの報告会が開催された。

以下、何名かのスピーチをここに採録して、参加者がこのキャンプで学んだり、決心したことを紹介したい。

◆フィリピンの大学生（カナダ在住）

『香港の中国人に対して持っていた印象が間違っていたことが、このキャンプで分かりました。フィリピンでもバンクーバーでも沢山の中国人に会いました、また、友人たちの話からも、中国人というのは難しい人たちだと思っていました。学校でも中国人はいつも一緒に固まっていたし、彼らの会話も、まるで喧嘩でもしているように聞こえたので、敢えて、彼らに近づいて知り合おうとはしませんでした。このキャンプで、グループや個人的な話を通して中国人への理解が深まりました。とても友好的な人たちで、いつも親切に助けてくれました。また、

違った側面を示された。中国から帰った翌日のキャンプ最終日には、香港の人たちのために、ユースキャンプの報告会が開催された。



●ここは秋葉原ではなく、広州！



●珠海のキャノンカメラ工場を見学

英語が余りできない人でも、一
所懸命、私たちとコミュニケーション
ションを図ろうとしていました。
もつと彼らと知り合いたいと願
うようになりました。』

◇台湾の大学院生

『私の家族においても、東洋の
多くの家庭で見られるような、
親子のコミュニケーションの問
題があります。私の場合は父と
の問題です。家族のためにして
きてくれたことに対して敬意こ
そ払っていましたが、父と話す
のが恐かったのです。三十年近
くも父子でありながら未だにお
互いを知り得ないということは、
とても悲しいことです。このキ
ャンプで「心の開発」のセミナ
ーに参加し、また、自分を省み
る時間を持つ中で、父に手紙を
書くべきだという考えが強まっ
ていきました。これまでの人生
で、もつと父のために言うべき、
あるいは、やるべきだったこと
を怠ってきてしまったことや、
父に十分関心を払ってこなかっ
たことを詫言いました。これが私
の生涯で父に宛てた初めての手
紙です。しかし、これが最後の

手紙になることは決してないで
しょう。』

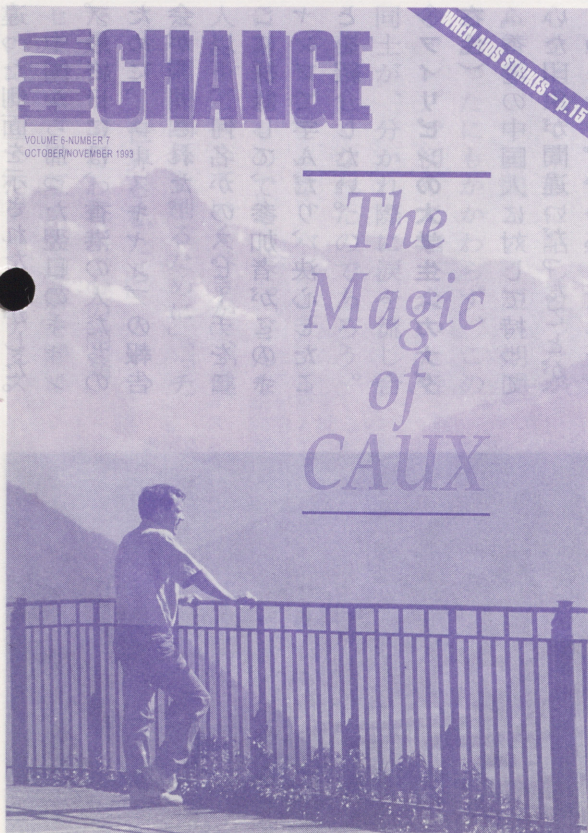
◇中国の大学生

『イギリス人のご夫妻が北京か
らの我々二人分の旅費を負担し
て下さったことを知り、感激し
てうまく話せません。このキャ
ンプでは年上の人たちが、我々
年下の者を両親のように気遣っ
てくれました。心と心の交流が
できました。将来、このような
キャンプを中国でも開催してほ
しいと思います。』

◇カンボジアの大学生（学生連 合会会長）

『十日間の間に友人というよい
お土産をそれぞれ得ることがで
きました。過去を忘れることは
できませんが、許すことはでき
ます。国の融合のために、ポル
ポト派を許したいと思います。
汚職にまみれた社会の中でも、
自分は正直に生きていきたいと
願います。また、嘘をついたり
した母や友人たちにも正直にな
るつもりです。』（了）

MRAワールドニュースマガジン



IT'S ABOUT TIME...

CHANGE

フォー・ア・チェンジ

定期購読受付中

世界中で起こっている変革(チェンジ)と
それを担う人たちのイニシアチブを!

MRAワールドマガジン「フォー・ア・チェンジ」誌(英文年間
6回発行) 定期購読ご希望の方は住所、氏名、職業、年齢を明記
の上、購読料(1年分=¥4,500 ※郵送料込み)を郵便振替(口
座番号:東京8-38289)、又は現金書留にて下記の住所にお送り下
されば、申込みを代行いたします。

〒113 東京都文京区千駄木5-49-2
ベガハウス ミタケビル102
社団法人 国際MRA日本協会
「フォー・ア・チェンジ」係

アジア・太平洋青年キャンプに参加して



兼松 恵 (神戸在住)

一九九七年の香港の中国返還を前に、北京、台湾、香港の三つの違った地域の中国人の青年たちが、中国の将来に思いを馳せ、意見交換した時の熱くばさ、皆真剣そのもの。国境を接しているながら、何という情報の少なさ。こうした出逢い、理解を深め合うことの素晴らしさ。インド、カンボジア、韓国、日本、中国、香港、台湾、フィリピン、マレーシア、シンガポール、オーストラリア、ニュージーランド、イギリスから約五十人が参加して、九三年度アジア・太平洋青年キャンプが開かれました。

互いに知り合うことから相手の国のことを学び、アジアの将来のために個々の生き方を見つめ直します。平和で、比較的安定しているシンガポールや日本の青年が、近隣諸国や世界の抱える現実に直面し、心を開き、自分の生き方や在り方を省みたり、自分が心を閉ざしていたことについて両親に謝る手紙を書いた青年もいました。歌あり、笑いあり、涙あり、そして新しい決意ありの十日間を共に過ごしました。彼らの間に築かれた信頼と友情こそ、これからのアジアにとってかけがえのないパワーの源になると、胸が熱くなる思いでした。

戦後四十八年を経て、やっと細川首相が、アジア、太平洋戦争が日本の侵略戦争であり過ちであったと国会の場でに発言して下さいました。アジア、太平洋諸国の人びと、そして、日本人も含め、余りにも多くの人が犠牲となったことを思う時、今日、こうしてアジア、太平洋諸国の青年たちと友情を育む機会が与えられたことに、深く心にこみあげてくるものがありました。

アジア、太平洋諸国の人びとの耐え難い心の傷が、少しでも癒されるためにも、一人ひとりとの出逢いの大切さを痛感します。



●インドシンガポール人からサリーの着方を習ったカンボジアと香港の参加者

過去五年間、脳梗塞で倒れた母の介護で、ほとんど家を空けられない私の生活ですが、先日、キャンプで知り合ったフィリピンの高校生から絵ハガキが届きました。彼は停学処分を受ける程の悪戯っ子で、両親に反抗ばかりしていました。分科会で皆で静まって心の声に耳を傾けた後、「自分の人生を変えたい。本当は両親を心から思っている。帰ったら両親に正直に今までの自分のことを打ち明ける」という決意を語ってくれました。絵ハガキには、「二人になっても、静まって心の声に耳を傾けることだけは忘れないように。きっと勇気と進むべき道が与えられるから」という励ましの言葉がありました。困難な状況にいる人びとを今すぐ訪ねて力になれなくとも、一人ひとりが与えられた場で、それぞれの心の声に従って生きる道を知っていることほど、大きな希望はないと確信します。九七年を控えて、香港の青年たちがこれからの中国のためにより遅く成長できよう、共に学び合い、力になつていきたいと心から思います。



●孫文の生家にて（右端が筆者）

APCに参加して 考えたこと

阿部秀樹
(東京ガス勤務)

私がこのキャンプに参加するきっかけは、三年前の台湾でのキャンプに参加した小学校の同級生に勧められたことである。それまでMRAのことは全く知らず、正直に言って参加を決めるまで迷いがあった。しかしキャンプを通じて多くの事を学び、今では参加して本当に良かったと思っている。

このキャンプで一番良かったのは、アジア各地の多くの若者と様々な意見交換ができた事である。例えば香港の若者は、中国に返還される一九九七年を控えて多くの不安を感じているが、香港にとどまり現状の体制を維持すべく努力していく意向が感

じられた。一方、香港の生活水準は高く、人々は都市生活を十分に堪能しているように思われた。また、中国から参加していた学生に、「今でも社会主義を信じていますか？」と聞いたところ、「市場経済の良いところは取り入れる一方、社会主義の良さは尊重していきたい」と答えており、多少混乱があるように思われたが、正直な意見が聞けて良かった。さらに中国の広州で教会を訪ねたところ、文化大革命のため二十年間も信仰を否定され、最近やっと信仰の自由が認められたという話を聞いた。文化大革命中の出来事は、読書や映画等知識としては持つて

いたが、直接弾圧にあった人々の話は、リアルであり、私は衝撃を受けた。その他に、ラオスからオーストラリアへの移民者やカンボジア人の話を聞くことができ、今更ながら「世界には色々な人がいて、それぞれに自分の人生を懸命に生きている」という当たり前の事実を認識することができた。

加害者としての日本を考えさせられる

また私はこのキャンプで、日本という国について考えさせられた。先ず第一に日本の過去についてである。今回の参加国のほとんどは、かつて日本が侵略したか植民地にした国である。私は大学で戦前のファシズムについて勉強した経験があるが、卒業後は日本の侵略の事実が意識にのぼることはほとんどなかった。今回、このキャンプに参加したことで改めて日本の侵略を再認識することができ、今後はアジアの人と付き合っていくには、過去の日本の行動を充分に認識する必要があることに気付いた。近年、戦争体験風化の

傾向があると言われているが、空襲等日本における被害だけではなく、加害者としての日本の側面についても日本の若い人々に周知していかなければならないと思った。

日本はもっとアジアから学ぶ必要がある

第二に、日本の若者の社会に対する無関心さについて気付いた。他国の参加者の多くは、自分の国の将来について、社会について、政治について真剣に考えているように身受けられた。



●カンボジアの歌を披露する代表

カンボジアの若者はいうに及ばず、返還を控えた香港の若者も、台湾の若者も社会に対する深い関心を持っているようであった。ところが現代の日本では、若者は自分の暮らしにのみ関心を示し、社会や政治に対する関心は低い。日本は平和で経済的繁栄を享受しており、あまり問題がないように見えるが、それは物質的な面のみであり、精神的な豊かさに関しては多くの問題を抱えているように思う。今回のキャンプは、日本の社会の在り方を考え始めるいいきっかけになった。

第三に、日本のアジア諸国への影響力の大きさに気が付いた。香港では日本企業の看板があちこちに目立っていたし、中国ではキヤノンの工場を見学することができ、世界各地で君臨する日本企業の姿を見ることができた。(広州で、「TOSHIDA」,「SOMY」,「東芝、ソニーの偽ブランドを見た時には笑ってしまったが)また文化の面でも、香港では日本の歌謡曲が人気があり(女性歌手では工藤静香が一番人気)、「東京ラブス

トリー」等のテレビ番組も良く知られている。日本の影響力と比べて、香港から日本への影響、情報は少ない。今後は日本もアジアの国々から様々な面で吸収する必要があるのではないかと思った。

このように今回のキャンプでは多くの発見があり、「百聞は一見に如かず」の意味が実感できた。これからも世界の各地に出かけて行って、単なる観光旅行ではなく、多くの人と語り合う旅をしたいと思った。今回参加の機会を与えていただいたことに深く感謝したい。



●広州で訪ねた教会

MRAビデオのご案内

日本語吹替版
(VHS/ベータ)

明日を愛するがゆえに

——イレーヌ・ロー夫人の生涯——

頒価 5,000円
(郵送料サービス)

ドイツを仲間外れにして
ヨーロッパの再建ができますか？

独仏の歴史的和解は勇氣ある
人々により始められ後のEC
設立の礎となった。

好評頒布中！



●イレーヌ・ロー

1898年生まれ。第二次大戦中、反ナチ抵抗運動の医療班を組織して闘った。三男をゲシュタポに拷問され、フランス人そして母親としてドイツとドイツ人を心から憎んだ。戦後間もなくスイスのMRA世界大会に参加したが、ドイツ人がいるのを見て直ちに帰ろうとした。しかし、ブックマン博士に「ドイツ人を除外してどうしてヨーロッパの融合と再建が出来るのか」と説得され、三日三晩寝ずに悩んだ末、ドイツ人を許し憎しみを謝罪した。その後、独仏間の関係改善に尽力し、後のEC設立のきっかけを作った。マルセユ選出の国会議員や仏社会党中央執行委員等も務め、世界各国を訪れ融和を説いた。1987年、88歳で没する。

お申し込みは
MRA事務局へ

03(3821)3737

奈良選挙浄化活動を振り返って

松下政経塾 田合 豪

良い奈良を私たちの手で作り
たいという志を持って、七月二
日から十四日まで、奈良県内の
近鉄主要駅での署名運動を中心
に、奈良衆議院選挙浄化運動を
行いました。

最初、六月三十日から行う予
定で、当日、「このような趣旨で
やりたいと思いますのでご協力
下さい。正しい、きれいな選挙
を推進する選挙管理委員会のお
役にも立つと思います」と、奈
良選挙浄化運動趣意書を持つ

て県の選挙管理委員会に挨拶に
行ったところ、返ってきた返事
は、「公職選挙管理法の《選挙期
間中の指定団体以外の選挙運動
の禁止》と、《一定の候補者に投
票を得せしめる、または得せし
めない署名運動の禁止》の二項
目に違反する可能性もある」と
いう思いがけないものでした。
ところが、公職選挙管理法の
どの項目に違反するのかを判断
するのは、選挙違反を取り締ま

る側の警察であるというので、
奈良県警察本部に行きましたが、
「実際にどのような運動か、その
内容によるので現段階では分か
らない」というあいまいな回答
しか得られませんでした。つま
り、どこに行っても責任の所在
がはっきりしないという壁にお
ち当たりました。そこで、弁護
士に相談したところ、選挙違反
にはならないだろうというアド
バイスを得て、実行することに
しました。

「自由と平等の民主主義」とは
いうものの、日本には様々な法
律や規制があり、正しいと思う
ことを始めようとしても、実際
には様々な障害をクリアしなけ
ればならないということをしな
うして身を以て体験しました。
色々とありましたが、七月二
日から近鉄八木駅を皮切りに、
駅頭演説や署名活動を始めまし
た。朝の七時という通勤時間帯
でもあつせいか、見向きもし

ない人やチラシを受け取っても
ちらつと見ただけですぐに捨て
る人も正直なところ多かつたの
ですが、反対に、「ええことや、
頑張りや」と励ましの言葉と共
に署名して下さった方や、「これ
から会社に行くけど会社の人に
も配ったるわ」と言って、一人
で数十枚も持っていかれた方も
おられました。

多くの方々のご協力も頂き、
何のトラブルもなく七月十四日
に無事終了することができまし
た。チラシを五千枚配付し、四
百七十九枚回収できました。(回
収率九・六%)

今回の反省点は、時間が足り
ず準備が充分でできなかったこと
だと思えます。今後工夫すべき
事項としては、(1)チラシに返信
用の葉書を付ける、(2)署名した
証として、各家庭の玄関などに
貼れるシールのようなものを用
意する、等が挙げられます。

一年後には統一地方選もあり
ます。今回の反省点を踏まえ、
さらに良い奈良、良い日本を作
っていきけるよう運動を継続して
いきたいと思えます。(終)



ビデオ「MRAの歴史」(VHS)

好評頒布中

頒価2,000円(送料込)

お申し込みは事務局へどうぞ

03(3821)3737

MRAとのさらなる交流を
望む上海の人々

昨夏のアジアのMRAグループによる上海訪問に引き続き、本年もオーストラリア人夫妻、台湾と日本から一名ずつの四名のMRAグループが、去る八月一日より六日間に亘り、上海を訪ね、青年指導者たちと交流を深めた。

オーストラリアに留学していた中国人青年を、オーストラリア人夫妻が親身に世話をしたために、彼のお母さんが一週間休



●青年指導者たちと共に

MRA国際チーム、上海を訪問し
青年指導者たちと交流する

報告
長野清志

暇を取って、我々の滞在中心よりもなしてくれた。殊に最初の晩は、典型的な中国家屋である彼女の家に泊めてもらうという貴重な体験も得た。翌日からはより便利なホテルに移り、旧知の上海青年連合会のリーダーたちを初め、多くの友人たちと会うことができた。会った人びとはそれぞれ開放化政策のマイナスイメージが青少年問題が増大し、深刻化していくのを憂慮していた。友人たちにはただ見せびらかすために不必要なものを買う青少年が増えています。クレ

ジット販売がまだ紹介されていないのが救いです。原因の一つは、両親が共働きのため、祖母に甘やかされることです。また離婚率も上がってきています。が、別れても住宅事情の悪さから子供を引き取るスペースがないので、そのまま同居せざるを得ず、子供に悪い影響を与えているというケースもあります。最近では、子供を望まぬカップルも出てきています」と語り、もつと青少年問題解決のための知恵を得たいとMRAとの更なる交流を望む人たちが多かった。

また、現在、青少年の間に、飲酒、ドラッグ、ギャンブル、自殺といった問題が大きくなりつつあるといい、若者たちが健全に余暇の時間を過ごし、正しい価値観を養えるようにと、余暇の過ごし方を指導する本を著した校長先生とも意見を交わした。また、社会のモラルや文化を高めるためには、若いカップルたちの教育が重要と考え、ただ結婚式に無駄にお金を使わせるのではなく、結婚という行事を通して、社会や仕事にも目を開かそうと、集団結婚式を行う会社



●上海郊外にある近代的なモデル農村



●上海の典型的な路地裏風景

を始めた青年指導者とも会うことができた。また、ジャーナリストの友人の一人は、「夫婦間の問題を抱えた後輩の相談に乗っていたが、周りの人からは、お金にもならない馬鹿なことをしている」というような見方をされた。今、メディアはサクセスストーリーに焦点を当てがちだが、もっと身障者や貧しい人たちに目を向けるべきなのに」と述べ、現状を変える力がない自分にフラストレーションを覚えてしまうと訴えた。

内面の豊かさを育む大切さ

確かに拝金主義の蔓延を初め、社会問題を沢山抱えているであろう中で、この様に現状を憂え、少しづつでもそれを改革しようとする人びとに会えて我々も勇気付けられる思いがした。途切れることのないタクシーや車の流れ、洒落たシヨウウィンドーに飾られた洋服、活気ある町並み、そして浦東区の新しい建築物の数々に上海の益々の発展を感じさせられたが、同時に内面の豊かさを育

むことの大切さに気付いている彼らのような人びとが増えることを願わざるを得なかった。物だけの豊かさでは幸せになれないということ、日本の我々は一足先に実験済みですと、伝えることが、我々にできることの一つではないかと感じられた。(了)

引き続き、九月には台湾師範大学のMRAのコーラスグループの学生、五十余名が上海で公演したのを初め、スイスやイギリスのMRAチームと中国代表団の相互訪問等、中国との交流の輪が着実に拡がってきている。

最新刊

MRA体験記

出逢い

NO.4

好評頒布中!

47ページ頒価450円



お申し込みはMRA事務局へどうぞ



●「小さな皇帝たち」とも呼ばれる子供たち(文化センターで)

事務所近況

●事務所仮移転のお知らせ

前号でお知らせいたしました通り、これまで事務所を構えておりました千駄木四丁目地区の再開発に伴い事務所を十一月四日より

〒113東京都文京区千駄木五-149-1

ベガハウスミタケビル 1-02

電話 (03)3821-3737

FAX (03)3821-6479

に仮移転いたしました。お近くにおいでの際は、どうぞお気軽にお立ち寄り下さい。なお、電話番号とファックス番号は従来通りとなります。

●第十六回MRA関西秋季大会開催

去る十月二日(三日)、爽やかな秋晴れに恵まれてMRA関西秋季大会が神戸の住友金属住吉研修所で開催されました。参加者は在日外国人を含む約八十名で、福岡の九州MRA協力会から派遣された地元企業の若い女性社員たちの姿もありました。三つの分科会では「個人と世界をつなぐMRA」をテーマに、教育問題、戦争と平和などについて活発な意見交換が行われました。関西秋季大会の特色であるほのぼのとした家庭的な雰囲気の中で、大会は無事終了しました。

●本年の皆様様様々なご協力にお礼申し上げますと共に、一九九四年が素晴らしい年になりますことを事務局一同願っております。来年もどうぞ宜しくお願いいたします。